

Title	床次竹二郎と平生釵三郎（二・完）：一九二〇年代の政党政治をめぐる
Author(s)	滝口, 剛
Citation	阪大法学. 2003, 52(6), p. 1-36
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/54973">https://doi.org/10.18910/54973</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 床次竹二郎と平生鈞三郎（二一・完）

——一九二〇年代の政党政治をめぐる——

滝  
口  
剛

はじめに

第一章 政友会の内紛と床次の戦略（以上、『阪大法学』第五二巻第二号）

第二章 政友本党の政権戦略

一 政本提携問題

二 憲本提携

三 実業同志会との提携

四 三党首会談から憲本連盟へ

第三章 民政党から政友会へ

おわりに（以上、本号）

## 第二章 政友本党の政権戦略

## 一 政本提携問題

第二次護憲運動を契機として平生と床次の政治観の相違が露わになったとはいえ、二人の交友は途絶えなかった。平生は、床次の政治活動そのものに巻き込まれることは避けつつ<sup>(1)</sup>、友人としてその動向に関心を持ち続け、また生活費程度の支援は継続した。床次も従来との関係を継続することを望み、一九二四年七月には平生を訪れている。このとき平生は連立内閣が倒れば野党である政友本党に政権がくるので、軽拳妄動せず、隠忍自重して黨員の統御を心がけるように励ました。また床次から政務全般について民間有志としての意見を求められている<sup>(2)</sup>。

だが、政友本党総裁となった床次のその後の出処進退は平生の期待に反するものとなった。政友本党は、政友会と憲政会との間で合同・提携問題をめぐって迷走することになるからである。

本章では政友本党と床次総裁の提携による政権戦略とそれに対する平生の反応を考察する。

まず問題となったのが、政友会と政友本党との合同問題である。政友会内には、徐々に加藤（高明）内閣を離脱し政友会内閣を目指す動きが活発化していた。そのため政友本党と合同して第一党の座を確保しようとする動きが顕在化してくる。同時に政友本党内にも呼応するグループがあらわれ、政本合同の交渉が始まった。

平生はちょうど同年九月から翌二五年四月半ばまで欧米漫遊の旅に出たため、帰国後の六月に床次から政本合同問題の経緯を聞いている。政本合同問題に関する床次自身の考えが直接窺えるので、順次検討してゆきたい。

「殊に幾回か繰返へされたる政友会及政友本党の合同に関しては政友会の策士連は政友本党中の弱腰連を誘拐して政友会をして多数党（第一党）たらしめ、以て他の形勢観望者をして政友会に意を傾けしめ一挙にして合同

を行ひ政友本党をして尤も微弱ならしめんとの計画あり。之は中橋一派にして同氏より金銭上の援助を受けつつある連中が主として蠢動しつつありしは奇観ならんも、是れ中橋氏自身が大成（4）に精通せずして単に吉植とか田辺とかいふ連中に説かれ、若し中橋一派がこの行動を促進せんか政友会に於ては中橋氏を重職に置くならんとの推測より来たる考へなれども其実は中橋に対する信任は全く欠乏せるものにして、たとへ合同が実現するとしても寧ろ中橋の復帰を喜ばざることが真相なり<sup>(3)</sup>。

床次は政友会との合同運動を政友本党を弱体化させるものとしてとらえている。特に政友本党における合同運動の主導者である中橋らに対しては、大勢に通ぜず、復帰すれば政友会で重用されると考えての運動であろうが思い違いであると述べるなど、極めて冷ややかな評価を下している。床次の合同への否定的評価と中橋への警戒心が窺われる。

しかし床次も合同して大政友会を復活させることを正面から拒否するわけにはいかなかった。そもそも護憲三派内閣の成立前後において、床次自身密かに政友会への無条件復帰を謀ったことがあった<sup>(4)</sup>。そこで、床次は合同の前提となる条件を提示した。その交渉経緯を床次は次のように述べる。

「勿論この二党が合同することは寧ろ自然に復帰することにして床次氏も不同意ならざるも今や政友本党は在野党にして政友会は政府党なれば何等無意味に合同する能はず。政友本党の主張に対し政友会が賛成するの意を明かにするの形を作るの要あり。左れば小学校教員国庫補助金を弍千円とすることは旧政友会の主張にして政友本党が党議として主張するところにして国民殊に農村が一般に渴望するところなれば政友会としても何等之れが為めに迷惑することもなければこの点に同意せば合同すべく党首の如きは問題とせず。高橋氏を党首として自分は平議員として大譲歩を為したるにも拘はらず、若しかかる政策を提げて合同せば憲政会は議會を解散して総選

挙を行ふに至らんことを怖れてこの大譲歩せる提案にも応せず無条件合同を主張したるを以て、合同談は打切となりたるものなれども政友会が合同せざる以上第一党たること不可能なれば策士連は中々思止まらず。政友本党に於ても合同して政権を手にはせざれば政党たるの意義なしなど公言するものもあり。合同不可能の主因は床次氏が現地位に恋々たるが故にして、床次さへ承知せば一瀉千里の勢い以て合同談は成立すべしと唱道するものありたれども、一度最高幹部会を開きて党の去就に就き大に協議し、若し幹部連に於て無条件合同に賛成なれば自分は何時でも其職を辞すも可ならんも無条件合同は政友本党の代議士をして信を選挙民に失はらしむるものなりと唱へたるに一同床次氏の主張に賛成し、無条件合同は *entertain* せざることに決定したるが、……<sup>(5)</sup>。

政本提携交渉に於いて、政友会側が無条件合同を唱えたのに対し、床次は、小学校教員国庫補助金を二千元とする旧政友会の政策を合意することを合同の前提条件とすることに固執した。床次が政策合意に固執したのは、まず政友会を護憲三派内閣から離脱させ野党化を明確にすることを狙ったからであろう。<sup>(6)</sup> 結局床次は幹部会において本党内の合同優先論を押し切った。

これに対して政友会の高橋総裁は三派内閣から離脱することに賛成ではなかった。政本合同を推進していた小川平吉によれば、高橋総裁は合同は加藤首相に対する情誼に反するとして積極的ではなかった。<sup>(7)</sup> 床次は解散を恐れることだと理解しているが、いずれにせよ高橋総裁のもとでは、内閣離脱につながる政本合同の交渉の進展は困難であった。

しかしその後政友会幹部の間に高橋総裁を引退させて田中義一を総裁に据え、政本合同を実現して多数党を形成し、一気に政権を奪取しようとする動きが出てくる。この高橋引退と田中担ぎ出しの経緯について床次は次のように述べている。

「其後政友会に於ては高橋氏が党首たるの実力あるものにあらず。如此き好々爺は財源としては必要ならんも已に財源たるの実力を失ひたる以上之を取換ゆるの要ありとて政友会の策士を以て名有る横田千之助又知囊として知られたる岡崎邦輔、ずるき根性を以て秀でたる野田卯太郎氏等が協議の上政界の攪乱者とも言ふべき三浦梧楼子を擁して党首入換を企てて高橋に代ふるに田中義一を以てせんとて熱海会議を開きつつありしが、この事が高橋氏の耳に入りたるより高橋氏も余りの事に憤慨して辞任を申出たる事が田中義一氏推薦の道行きなりしと其間悪党の張本ともいふべき横田千之助氏は病を以て長逝したり。横田氏は政友会が党費蒐集の爲めにしてあらゆる悪行に加担せし男なるが、終に悪運尽きて不帰の客となりしが、彼は悪行を以て大なる富を作りしと思はれしが矢張り悪銭身に附かずして死後百余万円の借財を残し整理せば辛ふじて其妻子は生活し得る位なりといへり。彼が金銭の力を以て自己の地位を向上せしめ他日総理たるの地位を固めんとて苦心懊惱せし結果が彼の健康を著しく害したるものなりと。高橋氏の憤慨は策士連の思ふ坪に填まりしものにして田中男擁立の議は促進せられたるが、其間久原氏が介在して政友本党と政友会の合同を斡旋することなれり。夫は田中男に花を持たせ田中をして政友会が尤も要望する土産たる合同を持参せしめんとする事にて久原氏は床次氏に説くに合同を以てし其意見を徴し、且田中男との会見を求めたるが床次氏は政友会は政府の与党なり。本党は反対党なれば、この両者が合同する前提としては政友会が政府と絶縁するの要あり。田中氏にして其決心ありや否や。若し決心ありとせば余は政界安定の外他意なきものなれば党員を勧誘して合同に賛成せしめんも其決意なきに於ては何等意見の交換の要なきにあらずやと二回の訪問に対しても同一の言を繰返へしたり。聞くところに依れば田中男が政友会入に付四拾万円を支出したりといふ。而して久原氏も目下金融不円滑の身なれば中々に高利的借財を為せりと聞く」<sup>(8)</sup>

野田、岡崎、横田ら政友会幹部による田中引き出しと高橋総裁辞任、横田の死の経緯はよく知られている。ただ、

床次の岡崎、野田、横田への見方が憎悪に満ちているのが目をひく。特に横田は、資金集めのためにあらゆる悪行に荷担した「悪党」と呼ばれている。政友会を分裂に至らしめた旧政友会総裁派に対する床次の反感は相当のものであった。

田中が総裁になる経緯に関する床次の物語も決して好意的なものではない。床次は田中総裁の誕生を主に金銭がらみの問題として語っている。床次は、高橋前総裁を「利権派」幹部があやつる傀儡としてとらえていた。その高橋総裁が資金が尽きて追われ、久原房之助の援助を受けた田中が四〇万円を手みやげに後を襲ったという筋書きで、総裁の交代劇をとらえていた。床次は田中政友会にも好意的ではなかった。

さらに田中が政友会総裁就任に際し、久原を通して政友本党との合同を申し入れてきたのに対して、床次が政友会の三派内閣離脱が前提であるとして断った経緯が語られている。しかし実際にはこの後政友会が憲政会と決別しても、床次は政友会との合同には動かなかった。結局、床次は田中総裁の下にたつことを好まず、政友本党を率いて自ら首相となることを望んでいたであろう。

このとき政友会は革新倶楽部を吸収し憲政会につぐ第二党になっていた。第三党に転落した政友本党は、政友会から党員を「誘惑」される立場になった。そのためか政友会の革新倶楽部吸収の経緯に関する次のような物語も好意的であるとはいえない。

「其間に生ぜし革新倶楽部の政友会入は昨年十一月以来計画せられしところにして真に悲惨なる政治家の末路を示すものなるが、政友会としてはこの合同に依りて第一党となり以て本党の弱腰連を誘出さんと試みたるものなるが、同倶楽部中にも異議者もありて合同に依りて党員として相当の地位を得るの見込ある者又は若尾氏に買取せられたるもの犬養氏に盲従せるもののみが政友会に入りしも予想を裏切りたること少なからざるが如し。而

してこの合同は秋田清氏の策にて犬養氏の窮境と同氏の陰険なる本根を利用したるものなりと」<sup>(9)</sup>。

床次は、政友会の革新倶楽部吸収を第一党となつて政友本党内の「弱腰連」を誘い出す工作だとみていた。「種々の手段を以て誘拐を試みつつある」政友会への警戒心をむき出しにしていると言えよう。

他方で憲政会側にも護憲三派内閣分裂を見通して、政友本党との提携を模索する動きがすでにあらわれていた。「憲政会も政友会の反問苦肉策を以て獅子身中の虫の如き行動を敢てしつつあるには心竊かに憤慨し決裂は近き将来のものとして、其際に処する途を考へつつあるもの如く、間接に政友本党に款を通ずるの道を求めつつあるが如く、又政友会内にも現在の如き状態を以て推移するを好まず。局面展開を希望し憲政会と絶ちて政友本党との合同を誠実に希望し之を幹部に迫らんとして連判状に調印せるもの三十一名に及び、尚連判状に名を書せざるも之と行動を共にせんとするもの約六十名ありと」<sup>(10)</sup>。

床次が第三党となつた政友本党を率いて、自ら政権の座を得る道は憲政会・政友会の対立を利用してキャスティングボードを握る以外はない。このことを床次はこの時点においてすでに意識していたであろう。

床次総裁のおかれた状況は極めて複雑なものであった。政友本党内には中橋ら政本合同派と後述する山本（達雄）の憲本提携論者の両方がかかえていた。しかも旧政友会時代とは違って、政友本党は第三党にすぎず、両者を調停すれば政権の座をねらえるというものではなかった。党内と党外議会勢力の両方を操作の対象としなければならなかったのである。一步間違えれば本党は政友会と憲政会に引き裂かれてバラバラになり、あるいは解散によって勢力を減ずることになる。

しかも床次は資金調達能力が弱く、その点からも党員の統率力には限界があった。たとえば海原清平から政友本党への資金提供を求められた際、平生は政友本党が資金に窮乏しつつあり、床次党首も窮状にあると聞いている<sup>(11)</sup>。



要するに党内に対立する勢力を抱えその統率に限界がある状況のなかで、衆議院においてキャスティングボートを握りうるポジションを生かすための綱渡りをする事、これが床次の直面していた課題であった。

この難問を克服して政権を得ることができると思われた方策が次で述べる憲政会との政権譲り受けの約束であった。

## 二 憲本提携

八月二日、ついに政友会は政権を離脱し、加藤（高明）内閣が憲政会単独内閣として成立した。憲政会内閣は少数与党内閣として第五一議會を切り抜けるため、政友本党との提携をはかった。他方、政友会側も本党との合同交渉を強力に進めた。

これに対して床次は、一方で「政策本意」を標榜しつつ実質憲政会内閣に協力する道を選んだ。その結果、五一議會では予算案が憲本の妥協により通過することになった。

政友本党が「政策本意」即ち是非々々主義を掲げざるを得なかったのは、政本合同論者と憲本提携論者が激しく対立していたので、旗幟を鮮明にすると分裂する危険性が高かったからである。<sup>(12)</sup> 床次の側近の一人小森雄介は、憲政会単独内閣成立後、床次のおかれた状況について「今や左右何れに向かはんかdilemmaに在り」<sup>(13)</sup>「氏は金力に於ては勿論政治的手腕に於ても決して政党の首領たるの実力亡きが如し」と平生に告げている。

それでも床次が実質的に憲政会との提携を選んだのはいくつかの理由が考えられる。第一に床次との関係が深かった貴族院研究会の幹部を憲政会が取り込むことに成功したことである。小森は憲政会と研究会との接近により、「床次氏と研究会の密接なる関係も今や其効果は薄弱となり、この関係をもって政界を脅かす能はず」と述べてい

る。<sup>14</sup> 研究会幹部は逆に政友本党と政府の間を仲介した。<sup>15</sup>

第二に政友本党が選挙を恐れたことである。政府を追いつめて解散総選挙となれば、野党としての本党は議席を減らす可能性が高かった。<sup>16</sup>

第三に資金力があり床次が依存しつつあった山本が憲本提携を支持していた。九月半ば政友本党代議士で山本の側近であった一宮房次郎は平生に、党内情勢を次のように語っている。

「結局政友本党には山本男が支持せらるる床次氏に属する一派と政権欲恣々として手段を選ばざる中橋一派が対立せるものの如く、而して床次氏は山本氏の支持と西園寺公が癌は蔓延せざる中に中断せざるべからずとの忠言に基き、中橋派に属する合同論者に向つて ultimatum を宣言せし結果、中橋氏自ら進んで合同を主張するの不利を感じて目下鳴を静めて機会を俟ちつつあるものなるが、床次氏も一時は総理大臣を夢みて其挙止が明確を欠くるものありしが、今や其夢より覚めて今日の処にてはたとへ黨員が三四十人に減ずるも政友本党の政見政綱を固持して邁往せんとの決心に至りたるものの如く、大に度胸を定めたるものの如し」。<sup>17</sup>

山本が憲政会との提携を支持したのは、人脈の近さ（三菱系）のほかにその財政政策が政友会より憲政会と近いと考えていたことによる。<sup>18</sup> たとえば山本は西園寺に向かって「自分の財政計画は現内閣と近きにより、且つ本党の調査案も同様なるに依り、政、本合同杯は夢みることを為さず、此の案で進む」ことを話している。<sup>20</sup>

だが決定的であったのは、加藤首相から次期政権を政友本党に譲るといふ言質を得たと政友本党幹部が思いこんだことにあった。加藤首相の代理としての若槻内相と床次は幾度か提携の交渉を行い、裏面でも憲本提携を推進する政治家が会合を重ねていた。<sup>21</sup> 実際に内閣側が何処まで約束したのかは不明であるが、少なくとも床次、山本らの政友本党幹部は政権譲り受けの約束がなされたと信じた。一二月に入り床次総裁が政友会との合同交渉打ち切りを

宣言した後、一宮は「山本男が推測するところに依れば本議会にして政友本党の後援にして通過せんか加藤氏は内閣を政友本党に譲り憲政会は之を援助するか又床次氏を総理とせる連立内閣を組織するか何れにしても来秋には政変ありて床次氏が総理たるの時期来るべしと打算して差支えなし」という山本の観測を平生に伝えている<sup>(22)</sup>。山本も次の内閣が政友本党に来ると信じていたのである(床次については後述)。

しかし首相指名において決定的影響力を持つのは元老であった。そこで政友本党の幹部は元老西園寺公望を訪問しその意を迎えようとした。前掲の一宮の発言からは、政友本党の幹部は西園寺から政本提携中止の示唆を得たと考えたことが窺える。

だが、西園寺は、表面的には床次など政友本党幹部を丁重に扱ったものの、本心では彼等を全く評価していなかった。彼の秘書松本剛吉は、西園寺の「床次は馬鹿だし」<sup>(23)</sup>、「本党も山本は固より床次は全て当になる男に非ず、元田に至っては論外だ」<sup>(24)</sup>という評価を記している。

それどころか、西園寺は中橋を政友本党から切り取り政友会に加入させるよう、松本に示唆している<sup>(25)</sup>。実際憲本提携が議会中に半ば公然化すると、政友本党からは中橋や鳩山一郎ら政本合同論者二名が脱党することになった。しかも党内にはなお政本合同論者が残っていた。西園寺のねらいはある程度の中したのである。

西園寺は政友本党の分裂を望ましいことと考えていたのであろう。第五一議会中松本に「兎に角憲、本両党が申会わせて委員長をとれば、不得已本党の合同派は分離せざるを得ざる羽目になるならん、斯くなれば解散もなく、又、御互の云ふ二大政党と云ふことになるではないか、君、之は面白いではないか」<sup>(26)</sup>と述べているように、西園寺は政友本党の分裂と二大政党制の確立を結びつけて考えていた。二大政党による政権交代を前提とする「憲政常道」の観点からは、キャスティングボートを握る有力な第三政党、即ち政友本党の存在は好ましくなかったであろう<sup>(27)</sup>。

また政権譲り受けの約束は「大権私議」となる可能性が大いにあり、天皇側近としては許容できなかった。薩派との関係から床次に比較的好意的であった内大臣牧野伸顕すら、内閣と床次の間に交わされた約束が政権譲り受けまで含むとすれば大権私議であるとして強い懸念を示していたのである。<sup>28</sup>西園寺も小川（平吉）に向かって、加藤首相と床次の間の約束に関する噂について「たとへ約ありとも第一政友会なるもの有るに非ずや、又自分も献替の地位に在り」と述べて、元老の権限を侵すものとして不快感を露わにしている。<sup>29</sup>

政権譲り受け戦略の弱点は、加藤首相の死により表面化した。翌一九二六年一月二八日、加藤首相が病死して若槻礼次郎がその後を襲った。当初床次は、若槻内閣が議會終了後すぐ辞職すると考えていた。たとえば床次は田健治郎に内閣辞職後はよろしくご指導願うと依頼している。<sup>30</sup>政友本党と加藤内閣の交渉に参与していた若槻は当然約束を守ってくれると床次は考えたのであろう。しかし実際には若槻は辞職せず、その結果床次は苦境に追い込まれた。

同年五月一日、平生が訪問した際の床次の様子は「何となく疲労困憊の態あり、政友本党の現状を現はすものの如く一見同情の念湧出するを禁ずる能はず」というもので彼の苦境を表していた。床次は「政界の現状に於て政友本党を如何にすべきやにつき殆んど成案なく苦心惨憺たるものあるが如し、自己の利害より打算して去就を決し嚮背を定むる黨員殊に代議士を率ひて正義の陣を張らんとする氏の苦心や実に名状すべからざるものあり」という党内の統率が困難な状況におかれていたのである。<sup>31</sup>

苦境の原因は、「憲政会も加藤氏生存中には前議會の無事終了と共に加藤氏は健康も不良なれば一先づ辞職して後継内閣の組織を床次政友本党総裁に命ぜられんことを上奏することの決心を床次氏に語り其意味に於て政友本党は政策本位を標榜して憲政会を援助し来りたるも不幸にして加藤氏の逝去となり若槻氏が総理となり氏は健康の点

に於ても桂冠の要もなく一旦総理となりたる以上この椅子を故なく棄つるの意なきは当然なるが……<sup>(92)</sup>と床次が語っているように、政権譲り受け戦略が加藤の死により破綻したことにあった。床次が語っているような加藤内閣との政権譲り渡しの約束が仮にあったとしても、それを公然化することは大権を私議することになりできなかった。公然化できない約束の確実な履行を求めることは難しい。それにもかかわらず、床次がこの戦略に縋ったのは、見通しの甘さをのぞけば、政権の近いことを約束しなければ党内をまとめることができず、また第三党の党首が首相になるにはほかに道がなかったからであろう。

このように政権譲り受け戦略の破綻が明らかになった後で、政友本党にはどのような道が残されているか。若槻首相は「単独内閣を以て次の議會を押切るの勇もなく又なるべく解散なくして次の議會を通過せんことは氏の希望するところならん」というのが床次の見方であった。そこで床次は政友本党には次の三つの道があると平生に述べている。

第一に「憲本連立内閣を組織し内務と鉄道の両椅子を占め以て総選挙に臨むの準備をなすこと」、第二は「第五十一議會の如く憲政会とは不即不離にして政策本位を以て行動し次の議會を解散なしに通過すること」、第三は「憲政会とは提携せず又好意的行動も出ず解散を覚悟して直往すること」である。しかし「第三策は尤も不利益にして次の議會に於て解散せんか政本党は今よりも少数党となるの恐あり、第二策を以て進むことは尤も危険少なきが如きも其間政友会誘惑の手が延び来り金力を以て買収を試むるを以て脱党者を生ずるの恐なきにあらず、第一案たる憲本連立内閣は次の総選挙に於て憲本の提携を策して政友会打破の爲めには尤も効果あるものもあるも地盤の關係上憲政会とは絶対に相納れざるものあれば如此き議員は忽ち脱党して政友会に走る至り政友本党の数は尚減少するに至るの危険あり」という情勢であった。平生は「何れにしても政友本党は危機に瀕するものにして床次氏の

憂慮は一方ならず、如何にして時局に処すべきや唯一山本達雄男を力とせる床次氏の現状や同情に堪へざるなり」と床次がおかれた危機的状況を記している。<sup>(33)</sup>

床次があり得る方策として考えていたことを整理すると、第一は入閣の道、第二は政策本意、即ち解散がないように議会において政府と不即不離の態度をとること、第三は解散を覚悟して政府と対決する道であった。だが何れの方策をとっても政友本党が議席数を保持する自信を床次は持てなかったようである。入閣して憲本連立内閣を形成する方策は、憲政会との地盤の關係から脱党者が続出する可能性があり、第二の政策本意＝不即不離の方策は最も危険が小さかったもののやはり政友会の誘惑により脱党者が出る危険性があった。また第三の政府と正面衝突する道は、解散、総選挙の結果勢力を減ずるおそれが強かった。しかし何れの方策においても床次は政権への見通しを失う一方で、本党は政友会からの引き抜きあるいは総選挙により勢力を減ずる懸念が強くなっていたのである。

一方床次の話を聞いた平生は、政友本党は憲政会と連立内閣を形成し「悪菌の棲息所」である政友会を打破する道が良いのではないかと考えた。<sup>(34)</sup>

入閣による提携の交渉は、実際に山本（達雄）と仙石貢鉄相により試みられた。若槻首相が大蔵と鉄道大臣の二ポストを渡す条件を出した。若槻は床次が期待していた内務大臣ではなく大蔵大臣のポストの提供を申し出ていた。これに対し、本党の幹部会では受けるべきか賛否が分かれた。結論を一任された床次総裁は連立拒絶の裁断を下した。<sup>(35)</sup>そこでやむをえず内閣は、町田忠治（憲政会）と井上匡四郎（貴族院研究会）を入閣させる改造をおこなった。

床次の提携拒絶の理由は、若槻首相が兼任していた内相を政友本党に提供しなかったからだともいわれる。<sup>(36)</sup>確かに選挙を考えれば内相のポストが非常に重視されたことは間違いない。ただ、床次が憲本連立による政本提携派の離脱を心配していたことも重要な要因であったと考えられる。

その結果床次は、最も安全であると考えていた「政策本意」路線をとる道を選ぶことになる。しかし、今度の「政策本意」路線は、前議会下のそれとは異なっていた。このことは、平生が出した憲政会一研究会一政友本党の陰謀を難じた手紙<sup>37)</sup>への次のような返書からも窺える。

「貴書難有拜受御礼申上候憲政一研究会一本党の陰謀は間違に御座候、小弟は憲本連立は遂に謝絶したるも研究との関係は本党の関するところには無之本党は従来通政策本位独立して進む覚悟、政憲研が如何にするとも此方は敢て関せざる積り、但し来議會果し無事なるべきや確信は無之寧ろ解散かと察し居候、為夫小生の胸中に往來するものは何れの問題を扱むべき又戦費は如何にするかの二つに有之候、委細は其内期拜眉、ともかく議會終了後興津に行き述べ置きたる通りに小生としては進み居候

本党は宣伝下手にて種々間違つて伝へらるるには閉口の次第に御座候、憲政と研究会との関係は御同感なれども小生が自分で連立を断つたから他に故障を云ふ如く考へられても迷惑なれば黙し居る丈の事に候<sup>38)</sup>。

この文面からは、床次が憲政会との提携を断念し「政策本位」路線を進むものの、解散・総選挙も覚悟していることを読みとることができる。連立内閣交渉破綻後の「政策本意」路線は、解散の危険性をより多くはらんだものになっていた。野党として選挙に臨むことは、政友本党が最も恐れたことであった。この書簡を読んだ平生が床次は殆ど策の出づるところを知らないのではないかと評価しているように、<sup>39)</sup>政友本党は厳しい状況に追い込まれていた。

さらに憲本連立交渉の破綻は、提携を仲介した山本と床次の関係を悪化させることになった。一宮の情報から平生は、山本が憲本連立に成立に努力したにもかかわらず「若槻氏の不誠意と床次氏の不決断の為に如此き終焉を告げ、今や憲政会も孤立し政友本党も立場を失ひたる現状を呈するに至りしにつき山本氏も大に床次氏を見限らんと

する態度に出でつつあるものの如く、床次氏の前途には暗影を見るの観あれば床次氏の為めに実に惜むべきことといふべく<sup>(40)</sup>と記している。資金力に乏しかった床次にとって山本との関係悪化は手痛かったであろう。

このように政局への展望を失っただけでなく解散による勢力減少の恐れが大きくなり、かつ党内でも孤立しつつあった床次に対し、平生は厳しい見方をするようになる。

そもそも床次の「政策本意」路線に対して、平生は当初より好意的ではなかった。機会主義を以て終始し確固たる方針を定めることができないのでは政党の総理として人心を収攬する所以ではないと考えた。<sup>(41)</sup>また中橋らの脱党の後には、床次は「優柔不断」で黨員の指導が十分ではなく、政治家として欠けると言わざるを得ないとも記している。<sup>(42)</sup>

ただ憲政会との提携に対しては、平生はそれほど厳しい意見は抱いていない。平生は憲政会の財政整理の方針に好意的であった。また前述したように憲政会との提携により政友会が打破されることを期待したのである。

しかし若槻内閣との入閣交渉が破綻した後の床次に対して、平生は厳しい見方をするようになった。入閣による提携交渉破綻後の政友本党の「政策本意」路線も、平生から見れば「何等国民の意嚮を指導すべき確固たる政策を發表せず単に他党の政策に対して是々非々主義を採らんとするものにして実に筒井主義といはざるべからず」ものであった。平生はこの調子では総選挙にあえば政友本党は瓦解するであろうと慨嘆している。<sup>(43)</sup>床次個人についても経済、政治に関する見識を持たず人の意見に動かされやすい彼の人物が時と共に露わになり、その声望は衰えつつあると考えるに至った。<sup>(44)</sup>方針の一定しない床次の党運営を見て、平生はこのような見方をするようになったのである。

このような時に朴烈怪写真事件が発生し、政友会は政府攻撃の材料にした。政友本党の一部も同調する姿勢を見



せつつあった。床次は九月一九日朴烈事件に関して政府を批判する声明を出す。これ以後政友本党は、朴烈事件を政策を超越した問題であるとして、政友会との提携による内閣攻撃へと転じることになった。さらに一二月末には政治の倫理化を唱えていた後藤新平の仲介により、政本の提携が行われた。ただより強固な提携を望む政友会に対して床次は限定的な提携を望み、朴烈問題、不景気回復問題、綱紀肅正問題の三問題に関する提携を約束するに終わった。<sup>(45)</sup>

陰謀臭の強い朴烈事件による倒閣運動への荷担に対して、平生は一層批判を強めている。平生は、朴烈怪写真事件による政府攻撃を床次の政本提携論者への配慮によるものであると見た。しかしまた、朴烈問題で政友会の尻馬に乗れば、政友会との合同論者に引きずられて政友本党は消滅に至るだろう、「無方策無経綸にしてしかも政権欲強盛な」床次がこのような運命をたどるのは、友人としては同情に堪えないがやむをえないと観察していた。<sup>(46)</sup>

だが床次は、政友会と合同するつもりはなかった。<sup>(47)</sup> 後藤の仲介による政本提携を「何が何やら政治圏外に在る我々には少しも諒解ができぬ奇劇」と非難した手紙を金一万円とともに送った平生に対して、<sup>(48)</sup> 床次は次のような返書を送っている。

「尊書拝受御尊意難有奉謝候。以御陰越年出来申候。朴烈問題で貴意と相反為事は遺憾に存候へ共、藤子干係提携の事は、小生としては進むべき途を同志と議会に於て共にするといふに過ぎざる程度にしか考へ居らず。何処迄も独立不拘束の立場は維持致居る積に御座候。唯之問題丈は相談して行くといふに過ぎず故に政府の態度に変化を生ずれば、此点は亦之を白紙状態に還へる訳に有之候。藤子の態度は如何にありとも、小生は知るところに無之、唯自分の進むべきを進みたるのみなり。政友方面では或はもつと意義ある提携を望むかとも察したれども、小生方は合同にも一般的提携にもあらず。従つて其前提にも無之候。夏以来の声明の通り進みたる事に候。

御礼まで草々」<sup>(49)</sup>。

床次は、朴烈問題で平生と見解を異にしたのは残念だが、政友会との提携は限定的かつ一時的なもので、三問題について議会中政友会と提携するに過ぎないと述べている。また政府の方針が変わればいつでも白紙にもどすとも述べている。即ち夏以来の「政策本意」路線そのものは不変であると考えていた。小森も、政友会との提携は後藤に引きずられた外交辞令の結果ではないかと見ているように、提携は真剣にはとらえられていなかった。<sup>(50)</sup>

政本合同に踏み切らない理由として、政友会の小川は、当時世間を騒がせていた田中政友会総裁の陸軍機密費問題のため、若槻内閣辞職後に田中総裁が奏薦されないことを床次が期待しているためであるとみていた。<sup>(51)</sup>さらに政本提携路線が明確になれば、山本ら憲政会との提携を支持する勢力の離反が決定的となったであろうことも重視されなければならない。

他方で平生は、床次のこのような行動を、現在の「政党者流」が「国民心理を流るる時代思潮」に無頓着で、権争奪に明け暮れていることの典型と考えた。このような利己的政治家ではなく、「憂国の至誠を以てする政治家」の手に政治を委ねることができるようには、国民の政治的良心と政治的知識を涵養する必要があるとも記している。<sup>(52)</sup>現実政治への関心の奥で、はやくも政党政治そのものへの失望感が平生の中にも芽生えつつあった。

第五一議會から第五二議會会前まで、床次総裁は「政策本意」路線を唱え続けた。その最大の理由は、党内に憲本提携派と政本合同派の激しく対立する二派を抱えていたことにあった。「政策本意」は憲政会とも政友会とも公式には距離を置くことを意味したが、実際には五一議會では憲政会と接近し、密かに政権の譲り受けをはかった。しかしこの戦略はうまくゆかず、五二議會前には政友会と連携して朴烈問題で倒閣を目指す方向に転じた。しかし野党として選挙に望む不安は大きく、白紙に戻して政府と妥協することも視野に入れていた。床次がこうした動きを

とった理由には、むしろ政友本党の脆弱さがあった。しかし平生はこのような政友本党と床次総裁の動向に批判と不信の念を強めていったのである。

### 三 実業同志会との提携

政友本党は、憲政会、政友会のほかにも一時期実業同志会との提携を模索した。平生は、実業同志会の党首である武藤山治とも親しく、この提携交渉を知る立場にあった。そこで本節では、政友本党と実業同志会との提携問題を平生がどのように考えたかについて見てゆくことにする。

平生は次第に一宮を通じて政友本党に関する情報を得るようになっていた。この時期一宮は平生と頻繁に接触をはかっていた。その背景には、政友本党なканずく山本が実業同志会との提携の道を模索していたことがある。平生は、武藤山治の商工業者の意見が政治に反映されなければならないという意見に共感を抱き、同党を支援していた。そのため山本の側近であった一宮が実業同志会に肩入れしていた平生を仲介役にして同党との提携をはかろうとしたのである。

一九二五年九月、前述の憲政会との提携の話の後、一宮は平生に「政友本党の元老たる山本男と武藤氏は其財政意見に於て大同小異にして共鳴するところ少なからざれば、政友本党と実業同志会とは連衡し得べき性質を有す」るので平生の仲介によりこれを実行したいという話を持ちかけた。<sup>53)</sup>武藤の徹底した緊縮財政論が山本の共鳴を得たのである。また実業家出身の山本は、実業家の政治運動を目指す武藤の政党を格好の提携相手と考えたのであろう。しかし平生は、一宮の申し出に応じることに躊躇した。その理由として平生は武藤と床次の性格の違いをあげている。即ち「武藤氏は床次氏の如く白紙の人にあらす。何事に付きても一廉の意見を有し其意見は如何なる障害あ

るも之を決行せんとするの勇氣と決心を有する人なれば、他人と附和することは殆ど不可能といふべき人なり。殊に同氏が……床次氏の如き特に学識技量優秀なるものを有せざるも能く人を納れ人に聞く襟度を有するとは一樣に論ずるべからず。故に其連衡が果たして行はるべきや否やは余は保証すべからず。勿論機会を見て之を武藤氏に告ぐることを辞せず」と告げた。床次の「白紙」主義とは異なつて、武藤が何事にも自分の意見を持ち、かつ非妥協的な性格の持ち主であることを理由に提携の可能性に疑問をなげかけたのである。

さらに平生は両党を仲介することにより、直接政治に巻き込まれることを恐れた。欧米漫遊から帰国後に東京海上火災保険株式会社専務を辞任した平生は、国民性社会性の矯正を自分の今後の仕事にすることを決心しており、直接政治に携わる氣はなかつた。<sup>54)</sup>

同年一二月一宮はさらに平生に山本も賛成しているとして、床次、武藤の間の提携の仲介を依頼した。しかし平生は、武藤は唯我独尊主義の人であり他党派と連合するのは好まないだろうと考え「余はうっかり仲介者たる能はず」とやはり消極的に対応した。また第三者的に武藤に説いてもだめだろうと考えていた。<sup>55)</sup>

結局平生自身は提携のために積極的に動かかなかつたものの、翌年になって床次と武藤が直接会談し政友本党と実業同志会の提携を決め政治更新連盟を結成した。この間の経緯を平生は武藤から聴取している。<sup>56)</sup>

「武藤氏は床次氏は已成政党の領袖中尤も純潔なる人なることを知ると共に同氏が世評には単に温良にして無力なる人なりとの悪評あるも事實は然らずして毅然として自信に殉ずるの覚悟ある薩人の長所を具備し政党首領たるの威厳も襟度も有する人なることを確かめたりとて床次氏の人物を賞賛措かず、二、三回の会見に於て意気投合せるものの如し、氏の語るところに依れば最初革新クラブの関氏が住吉の居を訪ひ三時間に亘りて会談し革新クラブと実業同志会と政治更新の名の下に League を形くり以て政界の刷新をなさんことに議纏り其後東京に於

て清瀬氏と千葉氏（実業同志会）との間に交渉を重ねたるが革新俱樂部は新生クラブの名の下に各種の党派と暗黙の諒解あるも表面入党に至らざるを便宜とする代議士と共に提携するを以て直ちに実業同志会と提携する能はず、終に実業同志会も合同して新生会なる一団体を形らんとの新提案をなすに至りたるが武藤氏は之を聞きて意外の感あり、如此きは政治更新の実を挙ぐるること不可能なるのみならず、元來実業同志会は革新俱樂部の如きたとへ其数は少なるも表看板が純潔なるものとなれば連盟せんと思ひしにも各政党と縁深き一人一党の無所属団と合同するが如きは意外とするところなりとて拒絶したる結果この談は停頓することとなりたるが其間床次氏は自ら武藤氏をホテルに訪問して連盟の名の下に政治の更新を企てんとの議を提案せられたるが武藤氏は已成政党殊に政友会の片割たる政友本党と提携することはと角の世評を免れざることなるが政友本党にして真に従來の行掛を棄てて政治の更新に力を尽くさんとすることを提言せるに単に已成政党なりとて改悛せるものを排斥するは政治家としては取らざるところなりと考へたるも今後実業同志会の方針を裏切らるゝ恐れなきやを確かむる為め床次氏を訪ひ

1、今後如何なる場合生ずるも超然内閣の如き政党に立脚せざる内閣を支持せざること

2、如何なる場合といへども連盟を利用して選挙費又は党費の援助を実業同志会に求めざること

の二条件を質せしに床次氏は二条件共に肯諾の旨を確答せられたるを以て前日打電せし如く連盟を形成するに至りたるものにして今後は二派の連合を以て衆議院に一勢力を形くり以て実業同志会の主張を実行するの機会を得たるものにして実業同志会は常に自由の地位に在ると共に其主義の履行を求むるを得ることとなるを以て余等に於ても承知おかれたしとの事なりき」。

武藤は小政党の行き詰まりを打開するための提携相手を模索していた。当初革新俱樂部との提携が挫折した後、

既成政党との提携に多少の躊躇を感じつつも、政友本党との提携に踏み切ったのである。

両党の提携のために積極的に労を執ることを躊躇した平生も、成立した提携そのものには当初好意的であった。たとえば勢力を減じつつある政友本党が局面打開のために実業同志会と提携したという新聞の評価に対して、平生は「狭量な評価」と憤っている。<sup>(57)</sup>

しかし実際には、やはり局面大開のための提携という側面が強いことは否定できないであろう。武藤からすれば、少数党に過ぎない実業同志会が、フリーハンドを確保しつつ、その政策の実行の可能性を求めたものであった。政友本党からすれば、武藤の財政政策に共感する山本の後押しと同時に、脱党による勢力の減少を補うという意味があったことは否定できない。このことは、成立した政治更新連盟の綱領が、政治の公明正大・純潔化、党弊の打破、社会正義の確立、政治の経済化としか記されていないように、その内容が曖昧であったことにもあらわれている。したがって状況が変化すれば、提携の意義も薄れてしまうことになった。

平生も、政友本党が夏以降憲本提携路線の破棄に向かうと、両者の提携の意義につき再び懐疑的になる。九月一日、実業同志会代議士千葉三郎が平生を来訪し、政友本党代議士をして実際の知識を富ませるために調査会を組織する旨を告げ、援助を依頼してきた。平生はこれに対し「余は現代の政友本党代議士中如此き政務調査を執行して自己の実際的知識を的確に増さんと希望する人幾人あるやを疑ふものなり」と政友本党への不信感を表明している。政権を得ようと策謀をめぐる右往左往する政友本党の代議士達に経済に関する知識をじっくり学ぶことができようかというわけである。同月二二日に千葉が再度協力を要請したのに対しても、平生は朴烈問題で闇討ち的に内閣を倒そうとするような非立憲的行動を取っている政友本党に真面目な政務調査は期待できないと答えた。<sup>(60)</sup>

実際、政友本党は、この後政友会との提携による倒閣運動へと向かい、実業同志会との提携は置き去りにされて

しまうのである。

#### 四 三党首会談から憲本連盟へ

政友会と政友本党の提携は、年明けには、両党による内閣不信任案提出までに至った。解散必死かと思われたが、年末の大正天皇の死去による昭和の「新政」のはじまりを理由に三党首の妥協がはかられた。即ち停会の後、一九二七年一月二〇日、若槻首相、田中政友会総裁、床次政友本党総裁が会談し、政争一時停止の申し合わせを行った。松本や研究会幹部が動いて、六月頃内閣は総辞職をするかわりに、今議会における政友、政友本党の協力を約束する旨の密約が交わされたのである。<sup>(61)</sup>

平生は、三党首会談と妥協の成立に驚き、既成政党の「不合理、無節操なる行動に驚かざるを得ず」と記すと同時に、実際問題としては解散になれば政友本党は「支離滅裂」になったであろうからこの妥協は床次にとって助け船となったというべきであろうと記した。<sup>(62)</sup> 実際には若槻は資金不足のため選挙を行う自信はなかったのであるが、内紛の絶えない政友本党にとっても苦しい選挙戦になったであろう。

また若槻首相が深甚の考慮を払うと述べたことを、床次が他日の辞職と解しているようだが、憲本提携による連合内閣を形作って総理として次期総選挙を行うまで現状維持をはかることが床次の夢想するところであると平生は推測した。<sup>(63)</sup>

平生の憲本提携に関する予測は的中した。この後、政友会に政権を渡すことを恐れた憲政会の安達謙蔵が動いて憲本連盟を成立させてしまう（二月二五日党書交換）。安達は、憲政会が床次を支持すれば、西園寺公は床次を奏薦するに違いないと交渉に際して本党側に告げていた。<sup>(64)</sup> ここで再び政権譲り受けの約束が交わされた。

ただし今度の憲本連盟は、従来の政策協定に比べてより強固なものになり、共同政務調査会の設置、選挙に際しての選挙協力まで含んでいた。<sup>(65)</sup> 憲本提携論者が、これ以上床次が右往左往できないようにより組織的な提携の仕組みを作ったとも考えられる。三党首の妥協後一宮は、山本男はもはや床次に十分には信を置いておらず、また一般にも床次は信用を失ったので、内閣が辞職した場合山本男に大命が降下するかもしれないとの観測を平生に述べている。<sup>(66)</sup> 本党における主導権が「政策本意」路線に不信感を抱いた憲本提携派に移ったことが推測される。

同時に、次期政権獲得への展望が「連立政権」による政治の安定へと「理論化」されることになる。この連立政権構想について、床次は、憲本連盟成立後自宅を訪問した平生に次のように述べている。

「小党分裂の現状に於ては其中のあるものが提携又は連盟の形式を以て政策本位を以て共同するの外なく政権は政界の安定政策の実行上可能性を有するものに大命が降下することが立憲政治の常道にして単に党出身代議士の多少を以てすることを以て常道とすべからず或は三四の党派が分立して何時其間に協同的連鎖なしとせず多少の順位によることが至当ならんか今や憲本両党間には堅固なるEYESが組織せられる以上当然なりと思へるが如し」。<sup>(67)</sup>

床次は、憲政常道とは必ずしも二大政党が交代して政権を担当するものである必要はなく、小党が分裂している場合には、いわば連立政権が成立するのが当然であると述べている。小党分立のもとでは、政党が連盟して政局の安定を期するほかないという見解は、床次の公の場における演説にもあらわれているが、<sup>(68)</sup> ここではより明確に政権と結びつけて述べている。床次の連立内閣論は、若槻内閣が辞職すれば本党に大命が下ることを想定しての発言と考えるべきであろう。<sup>(69)</sup>

平生はこれに対して、現実問題として現状の政友会とは提携できず、憲政会との連盟はやむを得ないと政友本党



の新方針を是認した。ただ平生の不信感は消えなかった。平生が当時問題になっていた台湾銀行救済について、安易な私企業救済は財界の腐敗をもたらすと糺したのに対して、床次ははかばかしい答えを返すことができなかった。このことを平生は、「政権欲に陶醉して是非の区別も正否の判断も鈍くなりたる」床次が、重大な結果をもたらす法案を研究調査せず賛成したものと考えた。<sup>(70)</sup>

平生は、政友本党の内情と床次総裁のおかれた状況の困難さについては相当の理解を持っていた。それでも「政策本意」を掲げて提携相手を頻繁に変えた床次に対する平生の評価は、「政権欲」のために判断力を失った政治家、という厳しいものになったのである。

### 第三章 民政党から政友会へ

憲政常道に関する床次と政友本党の想定は、元老西園寺のそれと同一ではなかった。周知のように若槻内閣が四月一七日台湾銀行救済問題で枢密院と衝突して総辞職すると、西園寺は当然の如く第二党である政友会の田中義一を次期首相に奏薦したのである。

政友会内閣成立後、憲政会と政友本党合同の機運は加速し、新政俱樂部を経て六月一日立憲民政党創設に至った。同時に杉田定一、元田肇ら政友合同論者二〇名は本党を脱党し後に政友会に合流した。<sup>(71)</sup>床次自身は民政党の顧問に就任することになった。元老西園寺が二大政党による政権交代を支持していることが明らかになった以上、大勢は第三党による政権獲得の目はなくなったと考えた。<sup>(72)</sup>

しかしこの民政党の結成は、政友会の嫡子意識の強い床次にとっては、不本意なものであった。長年の政敵であった憲政会と合流することは、床次の本意ではなかったからである。しかし憲本連盟により両党合同への道がしか

れてしまっていた。床次は迷いつつ、洩々党内の大勢に従うことになった。<sup>(73)</sup>

かくして床次の政權獲得戦略が不成功に終わったことが明らかになった。平生は原敬没後の床次の政治活動をふりかえり、その失敗の原因を「畢竟同氏が徒らに総理大臣たらんとする野望に囚はれて政界の大局を達観せざる罪に帰すべきもの」と評した。<sup>(74)</sup> ここには、目前の政權を得ようとして一貫した行動をとることができなかった床次への失望があらわれている。

それでも床次自身は、政權の座を目指すことをあきらめなかった。床次は政權獲得を目指して再び民政党を離脱する。

床次は民政党結成後、しばらくの間地方遊説など党務に励んだ。一九二八年の総選挙においても床次は民政党幹部の一人として活動し、平生に援助の要請を行っている。

しかし平生は床次の政治活動からさらに距離を置こうとするようになっていた。それはたとえば、一月民政党から立候補することになった坂本新作が訪れ、立候補に際して床次から平生に相談するのが当然と言われたと述べたときの対応に見られる。平生は「余は床次氏とは親友なるも政治上に於ては所見を同ふするものにあらず」と突き放したのである。<sup>(75)</sup>

また翌月には床次の側近の一人である大島清から、床次からの伝言であるとして選挙資金の拠出を求める手紙が平生のもとに送られてきた。その中で、床次の意思として、第一に現下の政局より自己の隠退し得ざる事情あること（国家と良政治を布く上に於て）、第二に、腐敗せる政界を革新するには自分の手に依りてなすにあらざれば不能と思われること、第三に此度の選挙は此目的を達するには尤も適当な機会であり、軍費を篤志家の援助に依つてこの政戦に勝利を得たい事、第四に一旦政戦に勝てる以上は自党の崩壊など眼中に置かず、徹底したる革正手段

をとって進みたい希望を有することなどが記されていた。しかし平生は床次が「政権欲より解脱せりと信ずる能はず」と感じた<sup>(76)</sup>。

もっとも平生は床次との関係を絶ったわけではなく、生活資金程度の支援も継続した。たとえば平生は六月、床次に田中内閣に対する批判を記した書簡とともに五千円を送っている<sup>(77)</sup>。そのため、この後も以前ほどではないが、なお平生は床次と接触し情報を得ている。そこで以下では、平生から見た床次の民政党脱党の経緯を見てゆくことにする。

選挙後床次は再び政局の焦点の人物となった。選挙の結果政友会と民政党の議席が伯仲し、小会派・無所属三〇余名がキャスティングボートを握る状況となった。この状況を見て、「無責任極まる少数の徒」が国政を左右することを憂えた松本（剛吉）は床次を民政党から誘い出し田中内閣の友党を作らせ、政局を安定させる工作を行った。松本の工作は西園寺の威光を利用したものであった。その結果床次は七月六日西園寺を興津に訪れ、会談後新党樹立の決心を固めた。八月一日床次は民政党に脱党届けを出した<sup>(78)</sup>。

床次が民政党を脱党した動機として、前田連山執筆の伝記は、政局への不安、政友会への愛情、对中国政策をあげている。特に、張作霖爆殺事件（六月四日）前後の中国情勢に対する民政党の对中国政策への反対を重視し、松本に欺かれたわけではないことを強調している<sup>(79)</sup>。これに対して、馬場恒吾は、田中・幣原両外交の中間を行く有力な第三党を結成すれば、元老西園寺が次期首班として床次を奏薦すると考えたことにその動機を求めている<sup>(80)</sup>。

平生と床次は、七月中旬に話し合っている。この時点ですでに床次は民政党離脱を決心しており、両者の会見は床次の動機についての問題に関する情報を含んでいる。

この会見において、床次は「現時の政界に於て真に国家を憂え国利民福を以て自己の責任として政事を調理せん

とする誠意ある者は自己のみとの固き自信を有するが如く壮語」した。しかし平生には、その裏面には「矢張り政権が直ちに自己の手中に帰するの見込あれば再び民政党を脱して第三党を組織し政友会を友党として乗出さんとするの意志明白なる」ように思われた。

床次の政権欲を見て取った平生は、次のような忠告を試みた。今や政友会の総理は世の信用を失えるのみならず、与党すらも信任を措かざるものが多数であるので政府が退くと共に総理の地位を失うことは明らかである。浜口総裁も健康不十分で到底総理として大政を処理するの任にはない。それ故政友会として田中総理退任の後何人が後継者たるべきかは問題であり、政友会は群雄割拠の状況であるので適当な総裁がいないことに苦しむであろう。故に政界の大勢は床次氏を再び担ごうとする政客が輩出するは当然ではある。しかしかかる策士の運動に軽忽に乗ぜられることは慎むべきである。群小輩の蠢動に耳目をかさず超然として大勢を達観し、民政党顧問として誠意を以て尽くすことが大切であると思うと。

これに対して床次は「氏は其中機会を見て興津に赴き西園寺公に面謁して氏の心底を打明け西園寺公が床次氏をして事局の拾取をなすを以て国家のため最良と真に考へ床次氏を推薦するの底意あるを確かめたる上、同公が国家の現状を憂へ愛国の至情より床次氏を推挙するの意を漏さるるに於ては、氏は世の毀誉褒貶を度外視し一身を君国のために犠牲にするの決心を以て奮起し、第三党を形成せんとの意」をほのめかした。<sup>81</sup>

床次自身は、第三党の結成と元老の奏薦を結びつけて考えていたことがわかる。床次は西園寺を頼りに政権獲得を第一の動機として民政党から離脱したのである。床次はこれから西園寺に会って判断すると述べているようにもとれるが、松本の日記にはこの後両者が会見したという記述はない。その前の西園寺との会談から、床次は元老に床次推薦の意図があると判断していたのであろう。

しかし西園寺に床次を次期首相として奏薦する意思がなかったことは明らかである。西園寺は床次との会談において意図的に誤解を誘うような言い方をしたのかもしれない。<sup>(82)</sup>即ち松本の策謀を西園寺自身が密かに裏書きして、床次を政局の安定化のために利用したのではないかと思われるのである。

平生は、床次が「余り自己を買冠り居れるにあらずや」と感じたものの、元老の意向については知るよしもなかった。そこで、「氏が今日政治家中に於て尤も誠実なる有力者なるを知るを以て若し西園寺公が support するに於て総理の任に就くに於ては或いは断然たる政治的革新を執行するを得るやも恐れざれば、余は成功を祈る外なし」と記している。<sup>(83)</sup>床次の成功を祈るほかはない、これが平生の状況判断であった。

実際には床次は自信過剰ではないかという平生の見方の方が正鵠を得ていた。八月一日現実に民政党を離脱すると、床次の誤算が明らかになった。創設したばかりの民政党を離脱する大義名分は乏しく、従来床次系と考えられた代議士すら彼に従わないで民政党に残留するものが続出した。結局床次は二〇数名の少数党（新党倶楽部）を結成したのとどまった。

平生は、「総理病ともいふべき野心」のために床次が時局や民心の動向を読み誤ったことを指摘し、また自分一人の行動に同志が追随すると考えたのは「時代錯誤」と言わざるを得ないと記している。<sup>(85)</sup>さらに意外の結果を招いた床次の自負心の強さも指摘している。<sup>(86)</sup>平生が見聞したその後の床次の評判もきわめて悪かった。<sup>(87)</sup>

新党結成後における床次の出処進退も問題であった。对中国政策の行き詰まりを見て取った床次は、一九二八年末に中国を旅行し、帰国後対外政策の修正を総理に勧告する。しかし、責任ある地位にない床次の中国行きは財界人の間でも常識はずれと嘲笑を浴びていた。<sup>(88)</sup>

他方床次を政友会に引き入れようとする動きがあった。しかし床次は当面復帰に積極的ではなかった。田中内閣

が終わりを迎えつつあると判断していたからである。<sup>(89)</sup>

これに対して床次の進退に関して平生の方が客観的な観察を行っている。即ち、床次は超然として政友会内部に自然に闘争がおこるのを待ち、中立の地位を保ちつつ政友会に復帰すべきであると考えていた。<sup>(90)</sup> もっとも床次が政友会に復帰すべきだと考えたのは、平生が政友会を支持したからではない。友人床次が政治家として生き残る方策を思案したのである。

やがて田中内閣崩壊後に当然の如く民政党内閣が成立し、その時点でようやく床次は政友会に復帰した。政友会において床次は今度は鈴木喜三郎と総裁の座を争うことになる。

しかし、民政党内閣下においては、平生は政友会入りした床次に対する関心を一層低下させる。平生は大阪財界を組織して民政党の金解禁政策を支持する方向へ動員することに精力を傾けるようになるからである。

#### おわりに

平生から見た床次は、清濁併せのむ「人格者」であったが、同時に「総理病ともいふべき野心」によって動かされていた。このような床次像は、当時の観察者の描く像から大きく離れたものではないが、友人として個人的に接触する機会が多かった平生による観察には、一般論以上に説得力がある。

また、原没後の政友会時代から政友本党時代にかけての床次の戦略にはある特徴があることがわかる。資金力に劣る床次が他を圧倒する勢力を握ったことはなかった。そこで一九二〇年代の床次は、中間勢力として、調整者ないしキャスティングボートを握る存在になることにより政権を得ようと意図していた、と行うことができる。原亡き後の政友会においては、総裁派と反総裁派を調停し同時に貴族院との間を仲介できる総裁候補として自己規定し

ていた。政友本党総裁となつてからは、政友会と憲政会・民政党の対立を利用してキャスティングボートを握り、政権譲り受け、連立内閣の戦略をとろうとしていた。この戦略は同時に政友本党内の憲本連立派と政本合同派の間でバランスをとりつつ、行われなければならなかった。諸政治勢力間の調整あるいは連携戦略に、敵を作りにくい床次の人柄、即ち「人格者」であることは適格的であつたと考えられる。

ただこの戦略の弱点は、対立が激化して政界の勢力配置が変動すると、自らの基盤が引き裂かれてしまうことであつた。実際政友会は分裂し、政友本党は解体に追い込まれた。

また、政権譲り受けの戦略は、二大政党の政権交代を支持する西園寺らの憲政常道論に反し、かつ大権私議の疑いもあつて、天皇側近の支持を受けられないという弱点を持っていた。さらに提携相手を頻繁に変更して、信用を失うことになつた。平生の記述からは、党内の統制に苦しみつつ、政権譲り受けの戦略に縋る床次の苦しい内情が窺われる。

平生は友人として床次が総理となることを望むとしばしば記している。しかし、特に政友会の分裂以後、彼に対する評価を低下させた。民政党が結成され本党が解体した時点で、平生は、原敬内閣以後における失敗に終わった床次の政治活動をふりかえつておおむね次のように記している。即ち、床次が原内閣で首相に重用されたのは、多数党として暴威をふるっていた政友会の「保護色」として利用されたからである。原の死後政友会において、「悪辣敏腕」の横田が「好々爺」の高橋総裁を利用して「温厚鈍腕」の床次と比較的清廉な有力者を排除した。床次の失敗は、護憲運動に反対したことであり、貴族院研究会を味方として望みを達しようとしたことが錯誤であつた。憲政党内閣のもとでは、内閣改造により「連合内閣」を組織すべきであつたのになさず、加藤の辞任を空頼みして失敗に終わった。また若槻内閣のもとでも憲本連盟に期待をかけたが、政友会に政権がゆき、床次の目論見は失敗

に終わった。<sup>(9)</sup>

大正デモクラシーの思潮を受け入れ普選を支持するようになっていた平生は、第二次護憲運動に反対した床次に強い不満を抱いた。また憲政会内閣下では、政友本党が「政策本意」を唱えつつ提携相手を変えて一貫性を欠くことになったことに失望するようになった。平生は床次を確かな識見を欠く政治家と見なすようになるのである。

さらに西園寺の奏薦をたよりに民政党を脱退するに至ってはその「時代錯誤」ぶりに落胆せざるを得なかった。

一九二〇年代の平生と床次の間の溝の深まりは、実際政治家とその観察者という違いだけでなく、戦間期のデモクラシー状況に対する認識の違いが徐々に大きくなっていったことによっても生じていた。一貫した政策と指導力により世論と国政を導く政治家を期待した平生に対し、床次は、世論を無視したわけではないが、政治家間の人間関係を重んじ、さらに政党以外の貴族院、元老などとの関係をも重視した。政策の面においても、たとえば経済政策の点で平生が都市、商工業者の観点を重視し、財政整理を支持し安易な財界救済に反対していたのに対し、「政策本意」を唱えた床次にこのような一貫した観点は乏しい。この点ではむしろ政友本党の中でもどちらかと言えば平生は山本と考えが近かった。それゆえ山本が平生に実業同志会との提携を依頼しようと考えたのは自然であった。それでも平生は友人として床次が首相になることを望み、彼がデモクラシー状況下における大局を達観できなかったため希望を達することができなかったことを惜しんだ。

他方政友会に対しては、平生は一層厳しい目を向けていた。政友会の内紛を床次という窓から覗いた平生は、総裁派を「利権派」としてとらえるようになる。分裂後の政友会についても同様である。また商工業者の視点を重視する平生は政友会の農村志向にも批判的であった。逆に、財政整理を重視する民政党に、おおむね好意的になってゆくのである。それでも一九二〇年代半ば過ぎまでは、平生は武藤の実業同志会に最も肩入れしていた。しかし行



き詰まった実業同志会がやがて政友会に吸引されて行くと、平生は金解禁政策を掲げる民政党への傾斜を一層強めてゆくのである。

- (1) たとえば平生は「床次会」のような床次を支援する団体からも距離をおいている（「平生日記」一九二五年九月二六日の条）。
- (2) 「平生日記」一九二四年七月一三日の条。
- (3) 「平生日記」一九二五年六月一〇日の条。
- (4) 「加藤内閣成立の顛末」岡義武・林茂校訂『大正デモクラシー期の政治——松本剛吉政治日誌』（岩波書店、一九五九年、以下『松本日誌』と略する）三一七頁、升味準之輔『日本政党史論』第五卷（東京大学出版会、一九七九年）八四〜八五頁参照。
- (5) 「平生日記」一九二五年六月一〇日の条。
- (6) 床次の伝記も、床次は政友会が与党である限り野党の政友本党と提携できないではないかと合同に反対したと述べている（前掲『床次竹二郎』八〇七頁参照）。
- (7) 小川平吉「政本合同問題備忘」『小川平吉関係文書 1』（みすず書房、一九七三年）五九九〜六〇〇頁参照。
- (8) 「平生日記」一九二五年六月一〇日の条。
- (9) 同前。
- (10) 同前。
- (11) 「平生日記」一九二五年六月一三日の条。
- (12) 『加藤高明』下巻（加藤伯伝記編纂委員会、一九二九年）六七七頁参照。
- (13) 「平生日記」一九二五年八月二八日の条。
- (14) 同前。
- (15) 前掲『加藤高明』下巻、六五四頁参照。

- (16) 同前、六七七頁参照。
- (17) 「平生日記」一九二五年九月一七日の条。
- (18) 前掲『加藤高明』下巻、六七三〜六七四頁参照。
- (19) 伊藤前掲書、一八四〜一八五頁参照。
- (20) 『松本日誌』一九二五年一〇月四日の条。
- (21) 前掲『加藤高明』下巻、六七六頁、前掲『床次竹二郎伝』八二二〜八二四頁参照。
- (22) 「平生日記」一九二五年一月一九日の条。
- (23) 『松本日誌』一九二五年八月三日の条。
- (24) 『松本日誌』一九二五年一月二二日の条。
- (25) 『松本日誌』一九二五年一〇月二二日の条。
- (26) 『松本日誌』一九二五年二月二二日の条。
- (27) 政党内閣期において「憲政常道」が二大政党による政権交代と考えられていたこと、またその実施が元老西園寺の存在と不可分であったことについては、升味前掲書、一一〜一三頁、土川信男「政党内閣と元老西園寺公望」『年報近代日本研究』20 宮中・皇室と政治(山川出版社、一九九八年)八二〜八三頁など参照。
- (28) 前掲『牧野伸顕日記』一九二六年二月一七日、三月三日、一一日の条。
- (29) 前掲「政本合同問題備忘」六〇四頁。
- (30) 『松本日誌』一九二六年三月七日の条。
- (31) 「平生日記」一九二六年五月一〇日の条。
- (32) 同前。
- (33) 同前。
- (34) 同前。
- (35) 前掲『床次竹二郎伝』八五一頁、安藤英男『幻の総理大臣——床次竹二郎の足跡——』(学芸書林、一九八三年)一八一頁参照。なお『松本日誌』一九二六年五月一〇日、一三日の条も参照。

- (36) 馬場恒吾『現代人物評論』（中央公論社、一九三〇年）九二頁参照。
- (37) 「平生日記」一九二六年六月二八日の条。
- (38) 「平生日記」一九二六年六月三〇日の条。
- (39) 同前。
- (40) 「平生日記」一九二六年七月二〇日の条。
- (41) 「平生日記」一九二五年八月二八日の条。
- (42) 「平生日記」一九二五年一月三〇日の条。
- (43) 「平生日記」一九二六年七月二〇日の条。
- (44) 同前。
- (45) 前掲『床次竹二郎伝』八七一〜八七七頁参照。
- (46) 「平生日記」一九二六年九月二〇日の条。
- (47) 升味前掲書、一一七頁参照。
- (48) 「平生日記」一九二六年一月一八日の条。
- (49) 「平生日記」一九二六年一月二三日の条。
- (50) 小森からの書簡（同前）。
- (51) 前掲「政本合同問題備忘」六一二頁参照。
- (52) 「平生日記」一九二六年一月二三日の条。
- (53) 「平生日記」一九二五年九月一七日の条。
- (54) 同前。
- (55) 「平生日記」一九二五年一月一九日の条。
- (56) 「平生日記」一九二六年四月五日の条。
- (57) 同前。
- (58) 前掲『床次竹二郎伝』八五八頁参照。

- (59) 「平生日記」一九二六年九月一日の条。  
(60) 「平生日記」一九二六年九月二二日の条。  
(61) 升味前掲書、一一四～一二四頁など参照。  
(62) 「平生日記」一九二七年一月二二日の条。  
(63) 同前。  
(64) 升味前掲書、一二五頁参照。  
(65) 前掲『床次竹二郎伝』九〇二頁参照。  
(66) 「平生日記」一九二七年二月一五日の条。  
(67) 「平生日記」一九二七年三月一六日の条。  
(68) 前掲『床次竹二郎伝』八九六頁参照。  
(69) 床次が、状況により、二大政党と多党制の間で議論を変えゆく点については、土川前掲「政党内閣期における床次竹二郎の政權戦略」五八～五九頁参照。  
(70) 「平生日記」一九二七年三月一六日の条。  
(71) 升味前掲書、一二八頁参照。  
(72) 馬場前掲書、九三頁参照。  
(73) 前掲『床次竹二郎伝』九一五～九二四頁参照。  
(74) 「平生日記」一九二七年五月二日の条。  
(75) 「平生日記」一九二八年一月二六日の条。  
(76) 「平生日記」一九二八年二月一日の条。  
(77) 「平生日記」一九二八年六月二六日の条。  
(78) 升味前掲書、一六二～一六六頁参照。  
(79) 前掲『床次竹二郎伝』九四二～九七〇頁参照。  
(80) 馬場前掲書、八六～八七頁参照。

- (81) 「平生日記」一九二八年七月一八日の条。
- (82) 西園寺と床次の会談の内容は不明だが、翌日床次は松本に会談が上首尾であったと語っている（『松本日誌』一九二八年七月七日の条）。
- (83) 同前。
- (84) 「平生日記」一九二八年八月一日の条。
- (85) 「平生日記」一九二八年八月三日の条。
- (86) 「平生日記」一九二八年八月七日の条。
- (87) 間接情報ながら、満鉄の機密費が山本条太郎を通じて新党に流れているという情報も得ていた（「平生日記」一九二八年九月四日の条）。
- (88) 「平生日記」一九二八年一月三日の条。
- (89) 「小川平吉日記」一九二八年一月一八日の条（前掲『小川平吉関係文書 1』二六〇頁）参照。
- (90) 「平生日記」一九二八年一月三日の条。
- (91) 「平生日記」一九二七年五月二日の条。

（付記） 本稿において使用した平生日記は、甲南学園に所蔵されている原本を解説・転記したものである。未完成につき翻刻ミスの可能性があることを明記するように当学園広報室より指示を受けた。閲覧の便宜をはかっていたことへの謝意とともにここに記すものである。